

平成9年度

ボクシングの勝敗に対するチームワークの影響に関する研究

指導教授 北森義明

順天堂大学

組織開発研究室 佐々木 浩一

平成10年1月

## ボクシングの勝敗に対するチームワークの影響に関する研究

組織開発研究室 佐々木浩一

### 第1章 序論

本研究は、ボクサーが連勝を重ねているとき、あるいは、敗北するとき、その選手個人の実力以外に、選手をとりまく人間関係が、関係しているのではないかという素朴な疑問からスタートした。それは、次のようないくつかの事例が語られるときも、新聞紙上等でも指摘されていることでもあったからである。たとえば、マイク・タイソンが負けたとき、その試合からトレーナーがかわり、さらに離婚問題でゆれていたし、鬼塚勝也が王座から転落したとき、それまで二人三脚でチームを組んできたトレーナー古口氏のジム移籍問題があったといわれている。このように、選手が人間関係上の問題に影響を受けて、試合に負けることが、いくつもあると考えられよう。そこで、これらの実態を調査し、その事例を、リーダーシップ研究の立場から解釈していこうと考えた。そのために、指導者の立場にあるトレーナー（名伯楽とよばれるほどの）へのインタビューで、そのリーダーシップスタイルの研究を、ボクシングジムの選手へのアンケート調査で、実際に選手は「ボクシングとチームワーク」をどのようにとらえ、どの程度必要だと考えているのか、また実際に、体験したチームワークにまつわる話などを聞きとり、実態を把握していく。そして、本研究をさらに発展させていくことにより、選手にとって無駄な敗北を、さらに、無駄な身体へのダメージを、少しでも減らすことができることに貢献できれば、幸いである。

これまで、ボクシングに関する研究は、非常に少ない。ことに、ボクシングとチームワークを結びつけた研究は、極めて少なく、未開の分野である。しかし、新聞、雑誌等で解説者がボクシングの試合の論評をするとき、「メンタルな面」あるいは「気持ちの持ち方」「伝統の勝利」等々の表現で指摘していることの中には、チームワークやチームの風土の勝敗に対する影響を含んでいることが多いのではないだろうか。今回の調査活動の中で、「ボクシングの勝敗にチームワークは関係していると思いますか」という問いに、否定的な答をするボクシング関係者は存在しなかった。したがって、本研究の予想される結論は、「ボクシングにおけるチームワークによる勝利」はあり得るということになる。

### 第2章 研究史

これまでボクシングに関する研究は、「減量」、「スポーツ医学的見解」、「運動生理学的見解」、「ボクシング哲学」などの、テーマで研究されることが多かった。今回ボクシングとチームワークを結びつけた知見は、ジョー小泉著、「ボクシングは科学だ」の中で、中島成雄が世界タイトルを獲った試合は、「チームワークの勝利」と述べられている。また、名トレーナー、名伯楽の条件として、1) ボクシング（技術面を含んだ全般）の知識、2) トレーナーとして教える能力、3) トレーナーとしての経験、熟練、4) ボクシング、またボクサーに対する愛情（打ち込み方）、をあげている。このことは、トレーナーと選手のチームワークを論じているものといえよう。<sup>3)</sup>しかし、ボクシングにおけるチームワークそのものをテーマとした論文を検索することはできなかった。

### 第3章 目的

スポーツ選手にとって、良き指導者との出会いは、その後の競技生活に大きな影響を与えることは、言うまでもない。ボクシングでも名トレーナーに出会いコミュニケーションをとっていくことで、二人の間にチームワークがうまれるのではないかと考えられる。

本研究では、ボクシングにおいて、チームワークは存在するのか。存在するとしたら、どのような場所に、どのようなかたちで関わってくるのかを明らかにしていきたい。そして、ボクシングの勝敗に対して、チームワークの及ぼす影響に関する法則性を解明するヒントを得たいということが、本研究のねらいである。

### 第4章 研究の対象と方法

本研究では、①これまで名実ともに名伯楽といわれているボクシングの指導者へのインタビューによる調査を実施並びに、②ボクシング選手に対する質問紙によるアンケート調査により、テーマに関する実態を明らかにしようとした。また、先行研究との比較により、トレーナーの発揮するリーダーシップスタイルを明らかにしていく。研究費用、時間、技術等々の研究活動の可能的限界から次の人達が研究対象者となった。アンケート調査の対象となったのは、石丸ボクシングジムのプロ並びにアマチュアの試合経験のある選手。指導者は、北森教授の紹介により、元世界ジュニアフライ級チャンピオン具志堅用高のトレーナーで知られる渡辺剛である。対象設定の基準は、具志堅の13回にわたる防衛成功など数々の試合の裏で、トレーナーとしての手腕ぶりや、今まで何人もの世界チャンピオンを育ててきた経験から、体系化されたトレーナー理論を確立していると考えられる。また、経験、実績からも、今回のテーマについて、論じることができると考えられたからである。また、比較対照となった研究史は、「スポーツチーム監督のリーダーシップに関する研究」、「行動科学の展開」である。

#### 1、選手に対するアンケート調査

アンケート調査は、石丸ボクシングジムのプロ選手6名、アマチュア選手5名を対象に行われた。

質問内容	ボクシングのチームワークについて
対象基準	プロの選手と試合経験のあるアマチュア選手
調査期間	11月21日～11月27日

#### 調査項目

- 年齢・・・( )才
- ボクシング歴・・・( )年
- 戦績・・・プロ( 戦 勝 敗)、アマ( 戦 勝 敗)
- 主な実績・・・

- Q 1、 選手とトレーナー、もしくは会長とのチームワークは、必要だと思えますか？  
 1、はい 2、いいえ 3、どちらともいえない
- Q 2、 なぜそのように思えますか？
- Q 3、 普段、練集中に指導をうけている人に、試合のときもセコンドで指示をだして欲しい  
 1、はい 2、いいえ 3、どちらともいえない
- Q 4、 はい、と回答した方は、なぜそう思えますか？
- Q 5、 試合中ピンチにたたされたとき、助けられた言葉や励ましは、ありますか？  
 誰の・・・  
 どのような・・・
- Q 6、 あなたにとって、会長、トレーナーは、どのような存在ですか？

## 2、渡辺剛トレーナーに対するインタビュー調査

日時 1996年11月15日

時間 P. M. 5時30分～P. M. 8時30分

場所 白井・具志堅スポーツジム、5階会議室

材料 OLYMPUS, Pearl recorder・L400マイクロカセットレコーダー

### 主な質問項目

- ボクシングにおけるチームワークとは
  - ① 選手・トレーナー間のコミュニケーションスタイル
  - ② 選手・その他のスタッフ間のコミュニケーションスタイル
  - ③ トレーナー・その他のスタッフ間のコミュニケーションスタイル
- 練習時と試合時の比較（選手とトレーナー）
  - ① コミュニケーションスタイルの特徴
  - ② アプローチの仕方の特徴
- チームスポーツとの比較
  - ① チームワーク
- 具体例
 

成功例	失敗例
① いつ、どこで、誰と誰	① いつ、どこで、誰と誰
② なぜチームワークの勝利なのか どういう点でそう思われるのか	② なぜチームワークの負けなのか どういう点でそう思われるのか
③ 具体的なエピソード	③ 具体的なエピソード
- よき指導者（トレーナー）と出会うまえとの比較
  - ① 具志堅選手の場合
  - ② ユーリ選手の場合
  - ③ エディ・タウンゼント・・・・・・その他

### 渡辺剛トレーナーのプロフィール

高校一年で、ボクシングを始めようと思うが、持病の膝が災いし、選手を断念。大学一年から、今は亡きエディ・タウンゼントのもと、トレーナーを志す。大学卒業後、アメリカロスアンゼルスに約三年間、単身武者修行にでる。具志堅 用高のトレーナーとして、その手腕を発揮したのをはじめ、数々の世界チャンピオンを育てている。現在、白井、具志堅スポーツジムのチーフトレーナーとして活躍中である。

## 第5章 結果と考察

### ボクシングとチームワーク

#### I) ボクシングにおけるチームワークとは

##### 1、ボクシングにおけるチーム構成

<日本とメッカであるアメリカとの違い>

これからあげていくことは、渡辺氏のインタビュー調査によるものである。

アメリカでは、選手も含めて7～8人のチームで構成されている。そのうちわけは、オーナー（ジムの経営者）、プロモーター（興行主）、マネージャー（選手代理人）、マッチメーカー（選手の相手を決め試合を組む）、トレーナー、選手となっている。オーナーは、あくまでジムの経営者であるから、選手とのチームワークという点からは完全に除外される。プロモーターは興行を組むだけの存在である。マネージャーはトレーナーと同格に扱われている。マッチメーカーも選手とは全く関係のないところで関わっている。このようにアメリカでは、完全に分業化されている。だが日本では、オーナー、プロモーター、マネージャー、マッチメーカーを、ジムの会長が一人でやっている。ここが日本のボクシング界のかかえている大きな問題であり、選手とのトラブルの原因となる点でもある。その結果チームワークの乱れにつながってゆく。さらに、アメリカと日本との一番大きな違いは、選手がトレーナーを雇い、マネージャーを雇うことができることである。トレーナー、あるいはマネージャーが自分に不利益を及ぼすと思えば、選手はこれらを解雇することができる。日本ではこの逆である。選手は会長、トレーナーに対して‘YESマン’に徹しなければ、試合ができないのである。このような状態であるので、日本のボクシング界全体の傾向としては、チームワーク以前の状況といえよう。日本では、この状況であるが為に、トレーナーが徹底的に考えないと選手が育たないのである。逆にアメリカでは、選手が良いトレーナーを自分で見つけなければならないし、自分とあわないからといって、すぐにクビにしてばかりいては、ボクサーとしても人間としても成長していくことはできない。人を観る目を持っていなければならない。このように、アメリカと日本の大きな違いは、選手のマネジメント体制が、全く逆なこと、ということがいえる。アメリカでは選手が主となり、日本ではオーナーが主となっているのである。

## 2、選手・トレーナー間のコミュニケーション

### <ボクシングにおけるチームワークとは>

先述のような状況であるから、日本の現状では、ボクシングにおけるチームワークとは、細かくいえば、色々あるが、選手とトレーナーの関係が、その全てであるといえる。そこにチームワークが成り立っていなければ、ボクサー自体の存在はありえないものとなる。ボクサーはトレーナーなしには、試合で勝つことはできないのである。試合におけるトレーナーの役割は、選手の頭脳となることある。選手を思いどおりに操作できなければならない。そして選手は、手、足となり相手と戦うのである。この役割分担が、お互い一点のくもりもなく認知し実行されてなければ、チームワークがとれているとはいえず、まして試合で勝ち進んでいくことなどできない。

### <選手とトレーナーのチームワーク>

では、どのようにしてチームワーク作りが行われているのか、また、選手とトレーナーのコミュニケーションが、どのように行われているのかを、元世界ジュニアフライ級チャンピオン具志堅用高とそのトレーナーを事例として述べていきたい。

トレーナーが選手の頭脳となる為には、技術を教えることよりはむしろ、選手を精神的にコントロールしていると思われるくらいの、一体になった関係を創りあげることの方が、大切になってくる。

表 1

選手との一体感を創るには、選手のトレーナーに対する、絶対的な信頼が不可欠である。そのためにトレーナーは、次のような条件が必要となる。①選手の性格を熟知していること、②常に選手の気持ちをよみ察していること、など選手より、優位に立っていなければならない。例えば、次のような事例があげられる。

[渡辺氏の掲げるトレーナーの仕事]	
・技術	2割
・コンディショニング	3割
・選手の精神的援助	5割

#### (事例1)

具志堅のかなりの才能を見込んだトレーナーは、まず最初に彼に、おまえは金がほしいのか？それとも名誉がほしいのか？を問うた。彼が何にハングリーであるのかを把握する為である。その問いに具志堅選手は「名誉がほしい」と答えた。そこで、トレーナーは、現役中は、絶対に金にこだわらせぬよう彼に言い聞かせ、何度も防衛すれば、引退してからいくらでも稼げると言って、彼にこのことを約束させた。「名誉をとる」ことがそれからの具志堅選手の目標となった。

このことにより、ジムのオーナーと金のトラブルを避けることができた好結果をも生み出した。前述したように、日本独自のジムのマネジメント体制が巻き起こすトラブルのほとんどが、オーナーと選手の金によるものだからである。このことは、「選手とその他のスタッフとのコミュニケーション」のところでも関ってくる。

#### (事例2)

具志堅は性格的に臆病である為に、余計なことを考え過ぎる傾向にある。そのためトレ

一ナーは、自分のボクシングのことだけを考えさせる為に、わざとミット打ちのとき、ミットをずらし、選手に疑問をいだかせ、選手にボクシング以外のことを考えさせないようにする。このようなことを、試合の3日前ころまでやり、3日前からは逆に、少々調子が悪くても、ミットを合わせて、あたかもクリーンヒットであるかのよう「パーン」という良い音を聴かせ、選手に自信を持たせて、そのまま試合まで突っ走らせる。

(事例3)

スポーツ選手にとって、試合のときの過度の緊張は大敵である。ボクシングにおいてもそれは同じで、自分のボクシングができなくなってしまう。そこでトレーナーの出番となる。本来、リングにあがる前までにより良い緊張状態に持っていかなければならない。しかし、リングにあがってもガチガチに緊張しているときは、選手の気持ちをリラックスさせるようにし、あまりにも緊張感がないときは、うまくたずなをしめさせる。

選手をマネジメントするという意味において、そのプロセスを遂行するについて、一般に三つの分野の能力が必要とされている。(ハース&ブランチャード、1978) すなわち、専門的能力、対人的能力、概念化能力がそれである。ボクシングトレーナーにおきかえると、

- 専門的能力・・・ボクシングの技術を教える能力。コンディショニング。
- 対人的能力・・・選手の精神的コントロール。
- 概念化能力・・・選手とオーナー、プロモーター、の間で、自分の役割を理解し実行していく能力。(ハース&ブランチャード1978)

これらの能力のなかで、もっとも重要な能力は、対人的能力である。対人的能力を重んずることは、過去の研究においても大切と考えられてきたが、今日ではこれは最も重要な能力と考えられている。このことから、渡辺氏の提示した「トレーナーの仕事」は、裏打ちされている。よって、ボクシングのトレーナーの性質や役割を、リーダーシップ研究の視点からいうと、トレーナーとは、選手を第一線監督職の立場から、マネジメントすることを目標としているということができよう。

<トレーナーのリーダーシップスタイル>

事例1、事例2、事例3にみられるように、選手はトレーナーの言うことに何の疑いも持っていないようである。では、どのようにしてこの信頼関係をきずきあげたのであろうか。

(事例4)

トレーナーは地域とのネットワークを作っておくことで、選手のジムの外での情報を把握できる。例えば、選手をよくいく店の店員と仲良くしておくなど。そうしておく、選手が前日、夜遅くまで飲んでた情報が、はいつてくるようになるのである。そこでその情報の使い方が、ポイントになってくる。まず、頭ごなしにしっかりつけるのはよくない。必ず選手に、逃げ道をのこすようにする。例えば、「なんか今日は動きにキレがないね。昨

日、遅く寝てないか？」このようにきりだす。そうすると選手はドキッとしてトレーナーには、わかってしまうのだ、と思うようになる。このように、自分の意志で気を付けさせるように働きかけるのである。このようにして、選手のプライベートな部分を把握し、口出しをせずに選手がセルフコントロールできるようにしていく。

#### (事例5)

ボクシングに限らずスポーツ選手のほとんどは、目立ちたがり屋である。あくまで主役は選手であるから、トレーナーが選手より目立ってしまうと、選手は不愉快になりパフォーマンスが落ちていく。したがって、トレーナーは裏方に徹するようにしていく。そうしなければ、選手はトレーナーに不信感を抱くことになる。例えば、選手がよい試合をしたとき、マスコミのインタビューに対して、「すべて選手が頑張った」と言い、悪い試合をしたときは、「すべてセコンドのミスだ」と悪者になりきる。ボクシングの選手とトレーナーは、一般的な夫婦と似たところがある。夫が選手で妻がトレーナーである。お互いに気をつかうことが、お互いを尊重することにつながり、意見を素直に聞ける。しかし、精神的距離が近すぎると、嫉妬したり束縛したりする。ある程度の距離を保ちながら、もちつもたれつ関係を維持していくことが、大切になってくる。

#### (事例6)

事例5のように、選手を持ち上げてばかりでは、単なるご機嫌とりとなってしまう。選手が良からぬ考えをもったときには、必ずつみとってやらなくてはならない。そういう意味での選手本位のボクシング美学というのは大敵である。身近で、あめとむちを使い分けてくれる人がいなくてはならない。あめとむちを使い分けるには、一般的な妻を演じてはできない。選手の何枚もうえで気持ちをよまなくてはだめである。でなければ、選手をいい意味でだまし、セルフコントロール力を高めることは不可能である。

#### (事例7)

なかにはだましにくい選手もいる。理屈っぽい選手は、トレーナーに一方向的にコントロールされることはない。しかし伸びる選手に理屈っぽい人は多い。そういう選手には、あるところまでは理論でアプローチしていき、それからは、逆にクールに接し、勝手にやらせておいて、他の選手に同じことを教えて、自分の間違いを客観的に見せてやることで納得させていったこともある。

上記の事例に見られるように、10人選手がいたら10通りの考え方があり、同じことを言っても、わかる人もいればわからない人もいる。選手を理解し、一言いっただけでこの選手は、どう思うかと、考えられなければトレーナーは勤まらない。トレーナーは、選手とは平面場にいながらも、あるところで一線をひかなくてはならない。そのとき、選手と相談してこのラインを決めるのではなく、トレーナーがそれを見定めること、そして、選手が考える前にトレーナーは、何でもわかっている、という状態を作らなければならない。ボクシングのトレーナーは、選手をマネジメントしていく立場にあるのである。そして、ボクサーとトレーナーという二人によって構成された組織が、うまく運営される為には、



マネジメント側の人たちに対人関係技能が必要とされるのである。5) その意味で、ボクサーの運命はトレーナーの手中にあるといってもいいのだ。ノンバーバルコミュニケーションによってお互いがわかる状態にまでなることが理想である。世界チャンピオンレベルの選手とトレーナーになれば、これができているという。選手のことを、のめりこんで考えることにより、集中することで、不思議とできるようになってくるのだという。そこで人間の五感以外のものがでてくるのかもしれない。渡辺氏は、世界戦の前は家で飼っている犬がまったく寄り付かなくなるのだそうだ。このくらいまでになるまで、信頼関係を築きあげていくことで、世界チャンピオンになるというビッグパフォーマンスを発揮できたということであろう。なお、具志堅氏本人も、各事例について同感であることの確認もとれている。

以上のようなことから、北森義明の「スポーツチーム監督のリーダーシップに関する研究」によってすでにのべられている、我が国のスポーツ界における一流監督が発揮する効果的なリーダーシップスタイルと、ボクシングトレーナーに必要とされるリーダーシップが、同一であることが考えられる。

### 3、選手とその他のスタッフ間のコミュニケーション

選手とその他のスタッフ間のコミュニケーションは、一つの会社に例えると、選手は一社員、オーナーが社長、ということがいえるだろう。選手とその他のスタッフが良い関係でいることが、ベストであることには変わりはないが、選手とトレーナーのチームワークが、不動のものとなっていれば、その他のスタッフとのコミュニケーションがうまくいっていても、あまり試合の勝敗に影響を及ぼすことはないだろう。トレーナーも含めスタッフで、もめていることは頻繁にあるようだがトレーナーはいつでも、選手の防波堤となっているうちは、なにも問題はないということがいえるだろう。

### 4、トレーナーとその他のスタッフ間のコミュニケーション

トレーナーが防波堤の役目をできなくなったとき、深刻な問題が起きてくる可能性が高い。前述したように、現在の日本のボクシング界における、選手のマネジメント体制の分業化が、されていないために、様々な問題がでてきてしまう。選手の側からジムを自由に移籍したり、自分に不利益を及ぼすトレーナーやマネージャーを解雇できないことから、周りのスタッフは徹底的に選手中心のビジネスを、考えていかななくてはならない。オーナー、プロモーター（日本の場合は会長）はどうしても利益中心の考えに、なりがちなので、マネージャー、トレーナーは選手の立場に立つことを忘れてはならないということがいえるだろう。

### 5、その他のコミュニケーション

#### <地域社会との関係>

トレーナーは地域社会との関係にも気を配るということも必要になってくる。選手の行動範囲などを知る、大切なコミュニケーションの一つとなり得るからである。選手にセルフコントロール力をつけさせる意味において、多くの情報を常に入手しておくことも一つの方法である。その他にも、選手の性格を知る手段として、選手の両親に逢ったりもする。

### <マスコミ対策>

世界チャンピオンクラスの選手になると、マスコミとの接し方も大切な要素となる。マスコミとうまくコミュニケーションをとっていくことで、チャンピオンの防衛回数を延ばすことも可能となってくる。新聞、テレビが自分を応援しているのといないのでは、大きな違いである。一つの例をあげると、マスコミに対して、まず、取材規制はしないかわりに協力もしない。自由にやってくれるようお願いする。このように、マスコミともコミュニケーションをとっていくことで、マスコミみんなでチャンピオンを盛り立てることにになり、日本国中で応援してもらえることになっていくだろう。

## II) 練習時と試合時の比較

### 1、コミュニケーションスタイルの違い

ボクシングの場合、試合中に自分の動きを把握し、考えながら動くことは特に困難なスポーツであるということがいえる。たとえ、自分のペースで試合が進んでいたとしても、セコンドの指示は必要不可欠なものである。そこで大切となってくるのは、トレーナーの指示どおりに動けるか、ということである。試合の時に限っては、選手はマシンになりきることで、頭脳であるトレーナーの指示を、ただ単に実行するということが、重要な役割分担となる。選手は「絶対にKOしてやる」というような余計な感情をはさんではトレーナーの指示どおり実行する事が困難となってくる。練習で培われた選手とトレーナーの一体感がこのことを可能とするのである。選手とトレーナーは共にリングで闘っているということがいえるだろう。

### 2、アプローチの仕方の違い

トレーナーは練習のときは、細かい技術的なことなど、徹底的に選手に教え、選手も納得するまで質問し、お互いに追求しあっている。しかし、これが試合となるとトレーナーは、選手に与える指示を、わかりやすい言葉一言を言うだけである。このことは、選手へのアンケートでも確認できている。試合中は、選手にきっかけを与える事が大事なことで、細かい指示は試合中に理解して実行することは困難であるからだ。きっかけをあたえることにより練習でやってきた事が自然に出てきて、結果的にトレーナーの指示を実践する事が可能となるのである。

### 3、セコンドとしてのトレーナー 3)

俗に「岡目八目」という。将棋や囲碁では、そばで見ている人の方が、実際に指している人より勝負の局面、また流れがよく見えることがある。

よいセコンドとは、この「岡目八目」の特徴をうまく生かすセコンドだ。選手が気付かぬ点を教え、勝利に導くこと。これが重要なポイントなのだ。

では、セコンドのあるべき形をまとめてみよう。

- (1) 選手を1分間リラックスさせ、休ませる。
- (2) 休憩中、選手がしてほしいことを把握し、それを的確に行う。
- (3) 確かな状況判断をし、選手に明確な作戦指示を与える。

- (4) 疲労やダメージで精神的にくじけがちな選手を、力強く励ます。
- (5) 止血およびその他のセコンド作業を手早く行う。
- (6) 相手側の選手、セコンドに目を走らせることを忘れない。
- (7) 自分の選手の顔色、つまり疲労度や心理状態を読み取る。
- (8) コーナーにいても、頭の中でかなり中立的なスコアリング（採点）ができる。
- (9) 普段から選手の特徴（長所と短所）をよく知り、実際的（つまり、現実にはできる）指示を与える。
- (10) コーナーにつくことで、選手に安心感を与えるような存在であること。選手に信頼されるためには、日常生活、ジムの練習において、尊敬、スキンシップ（人間関係）得ておく必要がある。

セコンドの善し悪しを一番よく評価できるのは、選手自身である。「この次も自分に、ぜひついてほしい。」選手にそう言われるようなセコンドがきっといいセコンドなのだろう。

3)

### Ⅲ) チームスポーツとの比較

前述したように、トレーナーのボクサーにたいするリーダーシップスタイルは、スポーツチームの監督のリーダーシップと同じである事が、考えられる。「スポーツチーム監督のリーダーシップに関する研究」のなかで北森がのべていることを、ボクシングトレーナーにもあてはめることができるようだ。

トレーナーは、選手にむける観察眼を自分自身にむけている様子が、随所にみられる。トレーナーの自分の内側にむけられた目は、さらに選手から送られてくるバーバル、ノンバーバルのメッセージを敏感に察知させ、トレーナーの自己理解を促進させている。このスキルは、トレーナーに、その時々状況に自分がどのようなリーダーシップスタイルで臨んでいるかをきづかせる。また、外にむけられた目は、選手のマチュリティの状態も含めた状況を的確に診断するスキルとして機能する。このコミュニケーション・スキルが、リーダーシップスタイルの選択に大きな影響力を持っているのだ。リーダーシップの効果的な発揮にあたっての直接的な影響は、ボクサーのマチュリティに適合したリーダーシップスタイルの選択に負うところが大きい。その発揮を根底から支配しているのは、トレーナーのスタンスであることを示唆するものといえる。それを自覚している一流トレーナーは、選手のスタンスと深く関り、選手のマチュリティを向上させようと行動しているのである。 2)

以上のことより、ボクシングのトレーナーと選手のチームワーク、あるいはトレーナーのリーダーシップは、チームスポーツと大きな違いはないようである。このことは、渡辺氏の意見も一致している。

#### IV) 現役選手の声（アンケートより）

##### 1、アンケート結果

アンケートによって調べられた、選手の、ボクシングにおけるチームワークの必要性に対する、考えや意見は次のようになっている。

表2 アンケート結果

<input type="checkbox"/>	Q1	ボクシングにおけるチームワーク 必要・・・・・・・・・・	11	(100%)
		不必要・・・・・・・・・・	0	(0%)
<input type="checkbox"/>	Q3	練習と試合、同じ人に指示を受けたい はい・・・・・・・・・・	11	(100%)
		いいえ・・・・・・・・・・	0	(0%)

表2より、11人中11人が、ボクシングにはチームワークが必要だと考え、練習と試合では、同じ人に指導されたいと願っている。その理由として、Q1) 精神的な面と技術的な面で、自分一人ではどうにもならないことを、選手は自覚していて、それらの面を補ってほしいと思っている。会長、トレーナーとの信頼関係が最も大事だと考えている。Q3) 選手自身が、心強く思えるため、普段の力をだしやすい。選手の長所と短所を正確に把握しているために、よりの確な指示を受けられる。このような意見が得られた。

##### 2、試合中、実際に選手が受けた言葉

褒められると選手は調子にのれる。「ここが勝負だ」という言葉に励まされた。ピンチのときでも、トレーナーに平然としていられると、選手は安心していられる。このような意見が、ほとんどだった。

上記のアンケート結果より、トレーナーだけではなく、選手もチームワークを必要としている事が、明らかである。

## V) 事例

### 1、成功例と失敗例

ボクシングにおいてチームワークが、理想的に回転したときの具体的な例と、うまく回転しなくなったときの例を一つずつ紹介していく。なおこの例はインタビューにより、聴取したものである。

#### <成功例>

具志堅選手が、ファン・グスマンから世界タイトルを獲った試合である。この試合は、トレーナーと選手のチームワークだけでなく、いくつもの歯車が、ガッチリとかみあった珍しい例である。ひとつの歯車は、もちろん具志堅とトレーナーである。二つ目の歯車は、トレーナーが、アメリカにいたところに、個人的に仲のよかったマネージャー・コルデロが、「おまえに世界チャンピオンをプレゼントしてやろうか。日本にお土産としてもってけ。」と言ってファン・グスマンのビデオテープをみせてくれたのである。わざわざ具志堅選手にとって、やりやすくて勝てそうなチャンピオンに、挑戦させてくれるというのだ。このとき5人の世界チャンピオンを抱えていたコルデロは、世話になった友人にチャンスをくれたのである。三つ目の歯車は、その話をジムの会長である金平氏のところにもって行って、OKしてくれたことである。四つめ歯車は、テレビ局である。世界タイトル戦は、テレビ局が放映してくれないと、ファイトマネーをかわしきれないのである。一つめにもっていった局ではことわられたが、二つ目にもっていったTBSで、OKがでてやってみようということになる。そしてこのときが、四つの歯車がガッチリとかみあった瞬間でもあるのだ。その結果、具志堅選手はすばらしい試合をしてタイトルをとり、視聴率も高い数字をとることになった。

#### <失敗例>

マイク・タイソンが、デビューしてチャンピオンとなり初黒星をきする前までは、とても理想的なチームワークを築いていた。タイソンの養父でありトレーナーであるカス・ダマト亡くなるまで、といったほうが、正しいかもしれない。タイソンにとってダマトは人生においてかけがえのない存在であった。ダマトのもとで、タイソンを育ててきた、ケビン・ルーニートレーナーに不満を感じはじめていたタイソンは、東京でダグラスと戦う前に、彼を解雇してしまうのである。タイソンのボクシングがおかしくなっていたのは、ここからである。それ以来圧倒的なスピードとパワーで勝ち続けてはいたものの、心身ともに充実した強いボクサーには、やはり勝てない。案の定、イベンダー・ホリフィールドにKO負けをする。三年間刑務所にはいって、精神的に成長したぶん、なおさら心の底から信頼できるトレーナーが必要となったのである。

### 2、名トレーナーたち

今回、インタビューを行った渡辺氏以外にも、名トレーナーと呼ばれているトレーナーは、たくさんいる。そのトレーナーたちには、共通する様々な点を雑誌インタビュー等から、みることができる。

#### <エディ・タウンゼントの場合>

日本人の歴代の世界チャンピオンで、彼の指導をうけた人はたくさんいる。エディの得長は、その話術にあるといわれている。彼のことについて書かれている文には必ず、「暗示ヨ、褒めることヨ」とエディの言った言葉を目にする事ができる。彼の口癖は「そうヨ、それヨ。」である。彼は選手の心をよみ、その時その時にもっとも効果的な言葉で励まし、褒め、叱り、ときにはギャグで選手をリラックスさせる。そのタイミングがすばらしいのだそうだ。彼のトレーナーとしての実力を、世界一と評するボクシング関係者は、たくさんいる。 3)

#### <ジョージ・ベントンの場合>

先日タイソンを破った、イベンダー・ホリフィールドのトレーナーとしても有名なベントンは、今までに、14人の世界チャンピオンを育てあげた名トレーナーである。彼の師匠にあたるエディ・ファッチから、「小さなことが大事なんだということ、ファイターは一人ひとりがみんな顔も考え方も違う。」ということを言われ、実行している。彼がトレーナーにとって大切だと考えていることは、自分自身を強く信じること、ファイターをよく理解しファイターの言うことを全て信じることだと、言っている。 4)

#### <松本清の場合>

去年亡くなられた松本氏は、業界では知る人ぞ知る名トレーナーだった。のべにして5人の世界チャンピオン、3人の東洋チャンピオン、そして24人の日本チャンピオンを生み出した名門ヨネクラジムのチーフ・トレーナーとして、1962年のジム創立時から32年にわたって腕をふるってきた。松本氏の名トレーナーぶりを語る逸話はいくつもあるが、もっとも有名なのはやはり「松本メモ」だろうか。4回戦からメインバンターまで、あらゆる選手の特徴を事細かに手帳に書き込んでいた。これが「松本メモ」である。実際松本氏に指導をうけた選手達は、「いつだって、オレたちのことを考えてくれた。」と誰もが語る。ジムの徹底して基本にこだわる厳しい指導で知られた松本氏だが、その真価が発揮されたのは、セコンドとしてだった。ラウンドの合間で短い言葉で常に適切な指示をおくっていた。 1)

## VI) アマチュアボクシング界の問題点

なぜプロの世界チャンピオンが何人も誕生しているのに、アマチュアの世界チャンピオンがほとんど誕生しないのだろうか。その理由の一つとして、トレーナーと選手のチームワークの悪さということが考えられる。アマチュアの場合、全日本選手権で、日本代表が決まったときから、普段指導をうけているトレーナーのもとを、離れて他の人の指導をうけなくてはならなくなる。そのために、前述してきたことから、いざ本番で自分の力が出しきれないのではないだろうか。

## 第6章 結論

選手をとりまく人間関係が、勝敗に関係しているのではないかという、素朴な疑問からスタートしたわけだが、そのために、ボクシングにおけるチームワークが、勝敗におよぼす影響について研究を進めてきた。その中で、チームワークが勝敗に及ぼす影響に、最も大きく関わっている要素は、選手とトレーナーの間で行われているコミュニケーションとその結果として生起する信頼関係であり、その信頼関係に支えられたトレーナーのリーダーシップであるといえよう。そして、トレーナーが、勝敗に及ぼす影響は決定的な影響力を持っていることを常に自覚していることが、最も効果的に選手を勝利に導くことができる要素であると考えられる。そのことから、トレーナーの発揮するリーダーシップに注目し、そのスタイルを他のスポーツチームの監督と比較した結果、多くの点で共通点が見られることから、その有効なリーダーシップスタイルは同種のもものと推測される。その他の要素に関しては、プラスに働けば、選手の勝利をより確実なものとするための、潤滑油のような、役割を持っているが、マイナスに働くと、勝敗に対するその影響は、最悪のものになってしまうということが、研究結果より推測される。

今後は、今回の実態調査の結果を踏まえて、ボクシングという格闘技における①チームワークにおけるトレーナーの有効なリーダーシップの要因を明らかにする。②そのリーダーシップが、ある選手がチャンピオンベルトを手にするということを唯一の目標とするチームワークのどの要素に、どのように影響を与えているかを明らかにする。さらに、③当該チームワークがその選手の所属するボクシングジムの組織風土にどのような影響を与えているのかを明らかにしていきたい。

終わりに、今回の調査研究で協力してくれた、渡辺剛トレーナー、彼を紹介してくれた北森教授、ジム関係者の皆さんに、感謝申し上げます次第である。